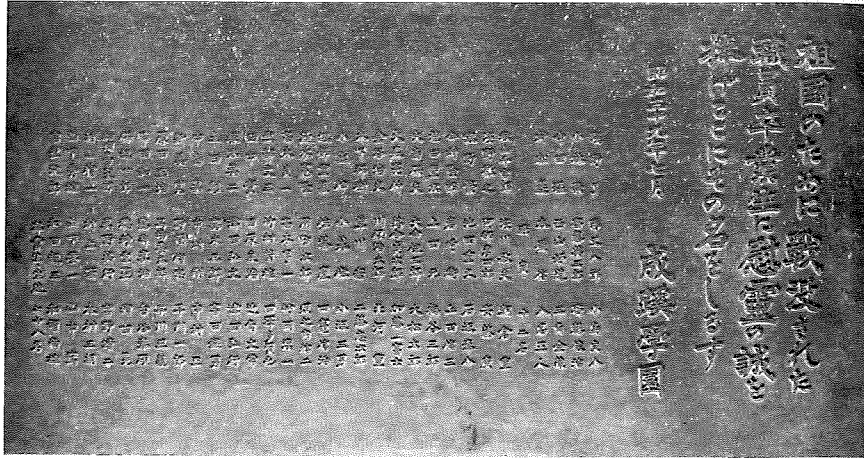


成蹊会誌

1965年7月第

24号





戦没者慰霊碑 成蹊学園



成蹊ラグビー関係物故者メモリアル

目次

| | | | |
|---------------|-----------|-----------|----|
| 政治経済学部 | の現況 | 関島久雄 | 1 |
| 工学部 | の現況について | 福田節雄 | 3 |
| 文学部 | の方針について | 金子武蔵 | 4 |
| 再び中高校長の任に就いて | | 栗原美能留 | 7 |
| 就任のことば | | 村上莞爾 | 9 |
| 成蹊学園史刊行会・物故会員 | | | 11 |
| 二つの記念碑 | | | 12 |
| 波左間の海に成蹊寮建設 | | | 14 |
| 岩永源作先生謝恩会 | | | 15 |
| 会費払込に画期的方法を採用 | | | 16 |
| 近況報告 | | | 17 |
| I 成蹊学園 17 | II 成蹊会 19 | III 会員 25 | |
| 成蹊会寄付金・会費申込者 | | | 39 |

政治経済学部の現況

政治経済学部長 関島 久雄

政治経済学部は創設されて以来、十五年を経過し、卒業生を社会に送りだすこと十三回、総数三千名を越えるにいたった。その間に、成蹊大学に工学部が新設され、さらに文学部が増設されることになった。政治経済学部は創立においては学部のうちが政治経済学科一つであったが、十五年の間に学生の勉学の指導を、政治、経済、法律、経営、教養の五つの系に分けて行うように発展してきている。このほかに、将来教職を志望するものには、その資格を与えるようにも指導してきて、現に、教育の仕事にたずさわっている卒業生も、次第に数多くなってきたのである。そこで、このような十五年の実績をふまえて、昭和四十年の新入生から、学部を政治学科と経済学科とに分けて学生を募集することにした。政治学科にはさらに、政治、法律、教養の三課程、経済学科には経済、経営の二課程を置いて、学生の志望するところに従って、専門的に、きまかく指導することになった。こうした新制度のもとに入学した新入生は四百名である。創立当時と比較すると約二倍の学生数である。学生数に応じて教室、研究施設も充実させてきている。

このように二学科にわたった一つの理由は、今までの卒業生には、政治経済学士の学士号を与えていたのであるが、成蹊大学の政治経済学部が創設されて数年後に、文部省が学士号について規定を設

け、そのうちには政治経済学士というのとはなくなってしまい、政治経済学士が二つに分れて、政治学士と経済学士となったので、この制度に従うためでもあった。

政治経済学部は二学科を設ける理由の一つは右のような、文部省の学士号に関する規定に従うことにあるが、もう一つの理由は、前述したように、十五年間に、内容が発展し、充実して、複雑化してきた実質に名目も一致させようということにあった。したがって、意図するところは、政治学科、経済学科のほかに、法律学科、経営学科において、四学科を揃えようというのであった。ただ、拡充、発展させるに、順序があるので、まず、政治、経済の二学科を設けることにしたのであり、法律学科と経営学科とは、早ければ昭和四十二年、おそくとも昭和四十三年には開設できるように、現在準備をはじめている。二学科を増設するためには、教師を揃えなければならぬし、教室も作らなければならない。二学科増設ということは容易なことではない。ただ、幸いのことには大学の中央図書館の建設がほぼ決定し、政治経済学部は二学科が増設される頃には図書館の建築も終っている予定である。そのなかには、図書館本来の機能をはたす設備だけでなく、その他の研究設備もできずであり、二学科増設にとっては好条件となるのである。法律学科と経済学科の二学科が増設される時には、学生数が現在よりも、さらに増加することが予想される。政治経済学部は政治、経済、法律、経営の四学科が揃った、そのききの問題は、政治経済学部から、二学部ないし三学部に分裂発展することであろうが、それは政治経済学部で揃った四学科を十分充実させることによって実力を蓄積して後のことであろう。現在は、まず四学科の設置に全力を



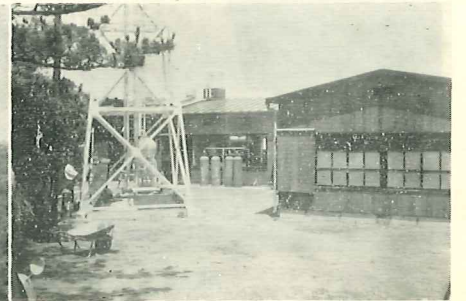
成蹊大学文学部新校舎の一部



成蹊波左間寮全景



成蹊波左間寮 (海側)



成蹊波左間寮 (山側)

つくさなければならぬ。

政治経済学部が創立されて以来、何人かの先生がなくなられて大
学を去ったが、今年、倉石教授が学園の停年に関する規定にした
がって、四月から現職を去られた。六十五才の停年まで健康で勤続
されたことはおめでたいことであるが、また淋しいこともある。
ただ倉石先生の場合には、なお講師として政治経済学部と文学部と
において講義をつづけられているから、教壇における倉石先生には
かわりがないのである。倉石先生は大学における停年第一号であ
る。

ここに二、三年政治経済学部女子の入学者がふえてきていた。
年々、約五十名の女子学生が入学してきて、にぎやかになってきて
いたが、今年文学部が新設されると、女子学生の入学者が半分に減
ってしまった。今後の女性に期待したいことは、男性とともに、政
治経済の常識をもつことである。それなのに、女子学生が半減して
二十五名となったことは残念であるが、それでもこれだけの女子学
生が政治経済学部に入學してくるということは日本の将来のために
希望がもてることである。

成蹊大学が政治経済学部の一つであった当時は、自治会の活動に
しても、文化部、運動部の活動にしても、学生部と政治経済学部と
が協力して一本として活動していくことが可能であったが、学部が
三つとなり、それも工学部のように、性格の全く異なる学部が加
わったり、文学部のように大部分が女子学生であるような学部が加
わり、大学そのものが複雑になると、今までのように、単純に一本
で、課外活動や自治活動が行えなくなってきた。今日において

工学部の現況について

工学部長 福田 節雄

昭和三十七年に成蹊学園創立五十周年を記念して開設されました
成蹊大学工学部は、今般その完成年次を迎えて機械・電気・工業化
学・経営工学の四学科共、一年次から四年次までの全学年が揃うこと
になりました。従って現在約九〇〇名の学生が在學しております。
開設以来今日まで実に順調に完成への道を歩み得たことは、われわ
れ関係者一同の深く喜びとするところであります。これもひとえに
三菱系各社をはじめ、産業界の強力な御後援と、卒業生各位の理解
ある御支援によるものと感謝いたしている次第であります。

この間当初からの構想に従って関係者一同教育環境整備のために
鋭意力を尽くして参ったわけですが、何よりも心強かったこと
とは卒業生各位の後援の絶大なこととあります。大学が若い学徒の
教育の場であり、また研究の場でもある点から、これに要する施設
の拡充には昭和三十七年の工学部校舎新築に始まり、本年四月の第
三期の増築工事竣工まで休みなく工事が進められ、去る四月には、
本館および旧理科館にありました経営工学科並びに一般教養関係の
施設を、四、五階の増築校舎に移転させることができました。また
内部の設備も電気計算機、アナログ計算機をはじめその他の実験設
備も着々と整えられております。

当工学部は成蹊学園の伝統である堅実な人格教育を背景とし、国

は、全くこんな状態にあるといつてよい。この問題についても、
何とかはっきりとした方向をきめなければならぬのである。

政治経済学部の政治経済学会は、従来とかわらず、年四回の「政
治経済論叢」を発行しているが、近年その活動の活発になった面
は、年何回か各方面の有名人を招いて講演会を開くことである。そ
していつの講演会においても学生の聴講者が多く、よるこばしいこ
とである。政治経済学会ができた当時も講演会を開いたがいつも聴
講者が少く、ついにいつの間にか講演会はやめてしまった。最近
はいつも聴講者が多く盛大に催されている。それだけ学生の性格もか
わってきたのであろうか。政治経済学会は教師、学生だけの会では
なく、卒業生もその会員となる資格をもっているものであるから、多
くの卒業生が参加されることを希望する。

政治経済学部では、政治経済学会の講演会のほかに、武蔵野市と
協同で、市政講座を年六回開いて市民の教養の向上にあたっている
し、新聞紙上などで、「主婦の一目目聴講」といわれている、大学
学則にもとづく聴講制度も十分に活用している。若い学生にまじっ
て、年輩のご婦人が、二、三名熱心に聴講している風景も、成蹊大
学の最近の新しい動きである。

成蹊大学政治経済部は、日々、生き、動き、変化している。それ
がよい方向への成長であることを祈っている次第である。

家と産業界との期待にそい得る着実な教育を行っておりますが、関
係者一同が全力をつくしているところは、まず、できるだけ小教単
位での学生への行き届いた教育を行うこととあります。すなわち、
専任教員一名当りの学生数も十名以下に抑え、各界一流の講師陣の
協力を得て、またさらに最新の設備をもつて、静かな環境と高い学
問的なふんいきの下に、学生の教育にあたっております。

工学教育としては工学基礎の教育を徹底し、科学技術の進歩によ
く適応できる能力を培うとともに、深い専門教育に合せて広い一
般教育に意をそそぎ、近代技術の開発、実践に必要な協力の精神と
能力とを養い、さらに実践力の涵養にもつとめて、工学者であると
同時に実践家である有為な性質を持たしめるよう、全幅の努力をわ
れわれは払っております。

理工科系の教育のあり方については現今の社会の受入れ体制の影
響もあって問題ともなっており、改めて検討すべき時期にきてい
ると思いますが、私どもといたしましては開設以来堅持してまいりま
した成蹊工学部の運営方針と教育方針にますます自信を固めている
次第であります。

今般ようやく当工学部が完成年次を迎えて、校舎の新築も二期二
三期と順調に竣工し、教員組織および内部の教育並びに研究の実
験諸施設も着々と整えられ、教育・研究の場としての工学部の体裁
が一応の完成をみましたので、これを機会に去る五月十五日官公
庁、諸会社および大学、研究所等各界関係者を招いて理事長主催の
下に当学部の対外披露会を催しましたところ、予期以上の多数の
方々の御来臨を得まして、盛況裡に終了することができました。こ
の披露会にあたって当工学部によせる関心と期待の大きさに改めて

われわれの責任の重さを痛感した次第であります。

当学部としては現在学部完成を契機に学部の基礎づくりから新たに拡充発展の段階に入ったわけでありませんが、世界の一流国では理工科系の学部教育に対する大学院教育の比重が、質的にもまた量的にも非常に高まりつつある現況にあります。当学部としても当面の目標としては高度な教育と研究体制を充実させるため産業界、学会の期待と鑑み工学部創立当初からの計画に従って、目下大学院工学研究科の開設準備を進めております。また同時に学部内の研究能力を高め、研究設備の増強を行いつつ、教員の研究体制の強化につとめております。幸いにして文部省より大学院工学研究科設置の認可があれば、本学の卒業生は他の大学院へ進学することなしに、本学においてその目的を充すことができるようになることと思っております。また近き将来、現在の四学科に加えて新学科の増設も検討いたしております。

明春は当工学部もいよいよ第一回の卒業生百八十余名を社会に送り出すことになりまして、本年度は初めて卒業予定者の就職問題に直面しているわけですが、幸いにして昨今の産業界の受入れに何かと問題がある中にも、卒業生各位の深い御支援の下に、本学部の教育方針について産業界の理解も深まりつつあって、新設の他校に比べ可成り良い進行を示している状況にあります。

以上もちまして工学部の現況報告にかえる次第ではありますが、卒業生各位におかれましてはわれわれの工学教育への微意をお汲みいただき、さらに御鞭撻御協力を賜ればわれわれ一同の深く喜びとするところであります。

文学部の方針について

文学部長 金子 武蔵

文学部の方針がどのようなかと思われるが、これはすでに去る四月十九日の入学式にさいしてのべたので、それを再説敷衍することにし、また若干の希望をのべさして頂くことにしよう。

第一に学園全体の教育方針は、「桃李、言わざれども、したおのずから蹊を成す」ということに帰着する。この句の意味を新参者である私が念のために反省して見れば、次のごとくであろう。モモとスモモとは、春にはくれないの、また真白き花を咲かせ、夏には葉陰によって憩いやすかけを与え、秋には、美味なる実を結ぶ。一言をもつてすれば、いずれも花も実もあるものである。したがって桃李とは、人才のことであり秀才のことであり俊英のことである。例えば「桃李門に満つ」とか「天下の桃李ごとく公門にあり」とかいうのは、天下のすべての俊英が、プリンスのような家に集まっていることをさすのである。要するに桃李とは、人才のことであり、秀才のことであり、俊英のことである。しかし、文学部には女子学生の多いことにちなんで、才媛を加えてもよいであろう、けだし「桃紅李白」といえば、桃花はくれないであり、李花はましろきことから転じて美人の色とりどりの風姿をも意味するからである。とにかく桃李は、花も実もあるものである。しかし、むろん、ものは言わない。しかし花も実もあるものであるから、なにも言わ

なくとも、おのずと多くの人々がそのそばに近づいてくる。しげしげと通えば、道なき草原にもおのずとコミチができる。既ち蹊を成すのである。これと同じように秀才、俊英、才媛を養成に努めるならば、不言のうちに、つまりくだなく当世風の宣伝などしなくとも、多くの人々を牽きつけ、また感動させるのである。そうして「言わざれども、したおのずから蹊を成す」について牽強附会を敢てすることを許されるとすれば、多くの人々が毎日歩いておれば、草原にもおのずと道ができるのであるが、桃李を、したがって秀才、俊英、才媛を養成するにあたっては、これと同じような持続的な健全な努力を不言のうちに実行するという成蹊の道を歩むことが必要であることになるであろう。

現代は宣伝の世の中である。宣伝とは要するにビヘイヴィアリズムによるもの、ビヘイビアリズムとは条件反射の理論によるものである。この理論を応用して犬にも円と楕円とを識別させることができる。円形を見せたときには必ずエサを与えるが、これに対して楕円形の場合には必ず電氣的ショックを加えることにする。かかる刺激を反復しているうちに、楕円形を次第に円形に近づけて行くのであるが、そうすると、長軸と短軸との長さの比が九対八になっても、犬はそれを円形と区別することができるのである。現代の宣伝とは要するに、このような条件反射を反復することによって、自家の商品が最良であると世人に思いこませることを目ざしたものである。

こういう宣伝もむろん必要である。しかし、少くとも事が教育である場合には、なにをおいても根本的に必要なのは、成蹊の道を歩むということである。桃李とは秀才のことであり、俊英のことであ

り、また才媛のことであるが、文学部の観点からしては、それは学問において、見識において、また徳性に関して人間としての尊さ、立派さを具えたものと解することができるであろうが、こういう人材を不言のうちになされる持続的な健全な努力によって養成すれば、とやかくとうるさく宣伝しなくとも、おのずと多くの人々を牽引することになる。即ち就職もよくなるであろうし、志願者も優秀なものに限られることになるであろう。かくて学園は桃李門に満つ——の盛況を呈することになるのである。

私は成蹊の道を右のように解するが、文学部の方針といってもこれ以外にはないと考えている。即ち現代の時勢と文学部の学部としての特殊性に即応しつつ、この道を歩むよりほかに、文学部の基本方針はないと考えているのである。

ただ教育といえども現実の行為であるが、現実はその制約のもとに立っているものである。だから所詮PRを閉却しようとするつもりは私にもない。凡そメーカーにとって基本的には重要なのは良質で廉価な商品をつくることにあるが、しかしそうかといって、いたずらにお高くとまってPRを怠り、販売網を整備拡充せずアンをもたなければ忽ちにライバルに水をあけられてしまうが、同様のことは私学の経営にもあるであろう。しかるべき価値をもっていても、これを一定の限られた期間に衆知徹底させることが必要であった、ただ漫然と自然の成り行きのままに放任することは許されな

い。だから私は正當なPRを閉却しようとは思わないのである。第二に凡そ大学教育とは基本的には専門研究を通ずる教育である。内容がほぼ確定しているために、主として授業のしかたのいかに問題となるのが普通教育であるのに対して、大学教育の場合に

は、教授せらるべき内容が確定せず、むしろ探究せられ研究せらるべきものである。各教師の献身的な独自の研究が学生の興味を喚起し、彼ら自身の研究を啓発し、彼らにアピールし、彼らの心をとらえることが必要である。したがって大学教育において根本的に重要なのは、教員自身の研究成果いかんである。ひとりの優れた学者の出現がひとつの大学ないし学部を盛況に導いた例はいくらもある。そこまで行かなくとも、教師がそれぞれの専門分野においてなほどうか「権威」としての資格をもったものであることが望ましいのである。幸いにして陣容の点ではいままでのところ望ましい結果をえているが、今後この方針を貫徹するつもりである。また毎年『文学部紀要』（仮称）によって研究成果を発表しつつ、大学院設置の方向に進んで行きたいと思っている。

かかる方針を貫徹するためには、陣容のほか、図書及び研究室を中心とする設備・施設の充実が是非とも必要である。本年はこの点について学園当局に要求を提出した処、幸いにして当局の理解ある態度によって承認をえたのは、感謝に耐えぬ次第である。しかし来学年も事情の許すかぎり同様の取計らいを賜りたく思うし、また成蹊会に対しても御支援のほどを懇願しておく。

第三に文学部には特殊の使命があるということである。大学教育は専門研究と通ずる教育であるが、これだけでは視野の狭い跛行的な人間が生じがちである。そこで専門教育と一般教養との調和において人間形成の実をあげようとするのが新制大学の理念である。しかし、じっさいにおいては科学・技術の専門的分化の必要は目を追ってはげしく、ために新制大学の理念は空論となりがちである。また学部によってペキュリアリティのあることも認められなくてはな

らない。しかし文学部こそ人間形成の悲願を引き受けるべき学部である。我々の学部には英米文学科と日本文学科と文化学科という三学科があるが、入学した学生には学科の区別を設けず、一年後に学科への所属を決定するようにしたのも、一般教養科目と専門科目との中間に基礎科目において、前者から後者への移行を円滑ならしめることを期したのもこれがためである。

第四に文化学科は従来の通念とは相容れぬ学科である。これまでの通念では文学部とは、哲史文の三群にわたるものとなっていた。ただ最近においては哲から社会学科と心理学科とがひとつの群としての独立を示しはじめているだけである。しかるに文化学科は、かかる通念と関係づけると、哲と史と心理・社会にまたがるひとつの学科なのである。かかる学科を創設したのは、大凡次のような理由によることである。これまでの文学部における哲史文のうち、哲と史とは、要するに文学以外の文化である。ここからして文化学なるものが設定せられてよいことになる。ただし現代における学問の発展は一面においては専門分化の激しさを意味するが、他面においては従来の区分のワクを破って合流せんとする情勢をも意味するからである。ところで文化の理解には史学と社会学とが必要であると同時に思想史もまた同様であり、そうして思想史という点で従来の哲は文化学科において新たな意義をもつことになる。それで文化学科において教授せられるべき科目群は、第一に文化理論、第二に思想史、第三に史学、第四に社会学であるが、我々はいたずらに広汎多岐にわたり無統一におちいることをさけて、広き意味における現代にフォウカスをおき、また実用とのつながりを緊密にするために、第四の「社会学」には心理学との結合においてむしろ文化テクノロ

ジイの意味をもたせたく思っている。要するに学問研究の発展の上からしても、現実情勢の変化からしても、かかる学科学問ないし学問を創設することが時宜にかなったものと我々が考えたからにはかならないが、多分の危惧をいだかれていたこの学科が大学設置審議会より承認せられたのは幸いであった。しかし前例に乏しいこの学科の形成にはなお困難な、しかしまた興味ある課題のあることは、これを認めなくてはならない。人員構成上のことのみならず、現在ではまた史に専任者を欠いているが、やがて他学部から移籍によって補充されるものと期待している。

第五には、現実においては文学部には女子学生の多いことを看過してはいないつもりである。女子学生の多いことが必ずしも大学における学部としての意義を低下させるものではない。ただし、人間の半数は女性だからである。私のいままでの経験でも、役不足の人の場合には奥さんに欠陥があり、能力以上の地位を保っている人の場合には、夫人の内助その宜しきをえているのである。ただ女子学生の多いことを顧慮して、花嫁大学におちないことを厳に警戒しつつ、教科のうちに実科的要素を加えたいと思っている。風紀問題についての配慮によって父兄の信頼に応えることもまた同様である。

第六には適正規模を守ることが必要だということである。我々のものによく似た学科をもつ関西における二つの大学をさる教授に視察してもらったが、その一方はうまく運営されているのに、他方は創立当時の意図を失い、分解の危機にさらされている。要は適正規模を守るものと守らぬものとの相違である。今後この点に十分注意したいと思っている。

最後は総合大学としての組織ということである。文学部も大学

の、また学園の一部である。だから他の学部の協力をえて大学全体としての、また学園全体としての力によるのではなくては活動することとはできない。しかるに成蹊大学では、一学部即ち大学の期間が相当に長期にわたったため、三学部を包含するに至った今日においては、組織上なお多くの欠陥をまぬがれない。その変革には成蹊会においても十分に関心をもちたいだきたく思う。

再び中高校長の 任に就いて

中学 高校長 栗原美能留

会員消息欄に寸信を送っただけではいけないということで、現在学園の中高校長としての一文を求められた。元來教育というものは、若し観点を広く人類文化という立場に置くと、歴史哲学とその批判とでもいべきものになるのであるから、それこそ日常不断の雑事におわれつつ喘ぎ喘ぎやっている身には及びもつかず、かといって、学園生成の流れの実体だけでも、携はる人の多角化に伴って、容易に真相を抽記し難い。そこで真に祖国や母校の前途を憂え、教員の上での事態を捉えようと思ひになる向には、かかる一文を超えての御来謁乃至は対面会談を懇請するの外なく、勢い不本意な断翰といったものとなるのを先づ以て予めお詫びしておく。

五十周年記念事業の一環としての中高校舎増修建設は、学園北西